
銀月の海賊船

来夏竜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀月の海賊船

【Nコード】

N2167Q

【作者名】

来夏竜

【あらすじ】

【冒険者エレイドと黒猫ダットの物語】 三作目

死刑執行を目前にした男は叫んだ。「俺は戻ってくる！銀月が輝く夜に、俺は戻ってくるぞお！！」

月日は流れ、冒険者エレイドは相棒の黒猫ダットともに、仕事を探して港町ミラを訪れた。重く、どんよりとした空気に包まれたその町は、『銀月の夜』を迎えようとしていた。

プロローグ

兵士に両脇をつかまれ、後ろ手で縛られた男は無理やり座らされた。目の前にあるのは断頭台。脇には死刑執行人が巨大な斧を片手に構えている。ここは広場に急遽組み立てられた、舞台の上。まわりには民衆がこの男の死刑をいまか、いまかと待ち受けている。

「…以上の事を持ち、死刑を宣告する。何か最後に言い残す言葉はないか？」

自分の罪状が読み上げられると、男は押さえつけられながらも、顔をスッと上げた。監獄生活で頬は痩け、乱れた髪と髭の風貌には、かつての面影は残されていない。けれど瞳の奥に燃える炎は、今、死を目前にしても決して消えることなく静かに燃えていた。男は声を張り上げる。

「俺は！」

まっすぐと通るその声は、広場を瞬時に静ませた。

「俺は戻ってくる！銀月が輝く夜に、俺は戻ってくるぞお！！」

男の声はやがて笑い声と変る。ぞっとするような、身の毛が弥立つような笑い声。

そして、彼の死刑は執行された。

青年は立ち止まると、潮の香りを胸いっぱい吸い込んだ。空は雲ひとつなく、かなりいい天気だ。

「なのに、やけに暗いよな…」

青年の呟きに、荷物の中から黒猫が姿をあらわし、器用に肩の上に乗った。

「まあ、当たり前な反応だろう。港町でありながら、船を出せなければ商売はあがったりだ」

青年は諦めたように、小さくため息をついた。

「ダット、街中では喋るなといつも言っているだろう？」

言われた本人は興味なさそうに顔を背ける。言っても、無駄か…。苦笑しながらエレイドはあたりを見回した。

「まあ、お前の言うとおりだけだな」

人通りは、商業町の事だけあって少なくはないのだが、船乗りらしい男達がいたところで、酒瓶片手に虚空を見つめている。

「とりあえず、ギルドだ」

双頭の鷲の紋章が描かれた看板を確認し、エレイド達は店の中に入っていた。扉につけられた鈴が小さくなる。ここはギルドとはいえ、酒場のはずなのだが…暗く、客は誰もいない。依頼が張られる掲示板に目をやると、アレンが言っていたように、依頼書であふれていた。稼げそうだが、エレイドは内心ニヤリとした。この間の事件で、新しい剣を手に入れたのは良かったのだが、財布の中身もかなり乏しくなってしまったので、この町まで足を伸ばしてきたのだ。

「依頼だったら、受けられないわよ」

沈んで、無気力な声がかけられる。見ると、誰もいないと思っていたカウンターのところで肘をつきながら、酒を飲んでいる人物がいた。

「？」

違和感を感じる。目の前に座っているのは筋肉質のがたいがよい男性。けれど…。彼が振り返って、戻ってきた言葉に違和感は確信へと変わる。

「あらゝあ？ずいぶんと可愛らしい子じゃない？」

酒くさい息を吐きながら顔を近づける男性に、エレイドは思わず後ずさった。なよなよとした彼の姿勢に、思わず鳥肌が立つ。

『あいつは悪いやつじゃないんだが、ちょっと趣向が変わっているというか、なんと言うか…まあ会ってみればわかるさ』

王都ドレイクでエレイドたちが定宿にしている宿屋の主人の言葉が脳裏で再生される。含みを持った言葉はこういうわけだったのか…

！内心悪態をつきながらも、引きつった笑いを返す。

「俺は、依頼しにきたんじゃない。依頼を受けに着たんだ」

「あなたみたいな、可愛い坊やが？」

一瞬男の顔に光が見えたが、次の瞬間、再び沈んだ表情へともどってしまった。

「あなたが？やめておきなさいよ」

又酒瓶を手に取り、コップへと注ぐ。

「判断するのは、こいつを読んでからにしてくれないか？」

そう言ってエレイドは懷からドレイクの親父さんが書いてくれた紹介状を取り出した。男は興味のない顔をしながらも、手紙を受け取り、封を切る。

手紙を読み終わると、男は興味深そうにエレイドをまるで値踏みするかのように、下から上へと見上げた。

「坊やがエレイドちゃんなのね？」

エレイドは背筋を走る悪寒は極力無視する事に決め、うなずいた。

「それでダットちゃんは…？」

「こいつさ」

エレイドは自分の肩に乗っている黒猫に指差した。ダット本人は興

味なさそうにそっぽを向く。

「あつ。自己紹介が遅れちゃったわね？あたしはこゝ、ミラのギルドマスター、ダンよ」

差し出された手を握ると、かなりの握力で握られた。痛みで顔をしかめそうになるが、もちろん顔には出さない。まったく、ペースが狂いっぱなしだ。

「とりあえず、座って」

エレイドが座ると、珍しくダットはテーブルではなく隣の椅子に飛び降りた。そんな様子は見えないが、ダットもダンが苦手なのかもしれない。

「あの親父さんがこうまで書くから、実力はあるみたいね」

「一応、二級も持っているが？」

ギルドに登録されている冒険者は、その実力や実績、または試験によつて階級に分けられる。階級は六級から始まり一級までである。実はその上もあるのだが、とりあえず割愛しておこう。それでもエレイドの持つ二級の冒険者のメダルは、それなりの腕を意味している。「うゝん：そうね。このままでは何も変わらないし：」

ダンはいまだに少し渋りがちだ。しばらく考え込み、ようやく決めたのか、まるで自分に言い聞かせるかのようにうなずいた。

「わかったわ。とりあえずミラの状況どこまで知っている？」

「残念ながら、ほとんど知らない」

「そう。じゃあそれから説明しなければならぬわね」

ダンは小さくため息をしコップの中身をあおろうとしたが、空だったのか再びテーブルに置いた。ついでに酒瓶にも栓をする。

ダンが話し始めようとした時だった。扉が開くと同時にくくりつけられた鈴がなった。

「まったく、今日はお客さんが多いわね。悪いけど、依頼は受けられないわよ？」

「私は依頼を頼みに来たわけじゃないわよ？」

なんでお前が……。聞き覚えのある声に、エレイドはゆっくりと振り返った。

「エレイド？なんであんたがいるの？」

入ってきた女性はきよとした表情になる。長い髪はまとめあげ、うしろで銀の髪留めで止めている。

「それはこっちの台詞だ」

「あたし？室長の指令。まったく、ようやくドレイクでゆっくりと休めると思ったら、にこやかな顔で指令書、持ってくるからいやになっちゃう！」

「おや？お二人さん、お知り合いかしら？」

会話から締め出されていたダンが、加わってくる。

「あなたが、このギルドマスターね？あたし、フラム。一応、火の魔術師よ」

そう言つてフラムは首からかけた金色の鍵を取り出してダンに見せた。ダンは目を見開き、口をあんぐりと開ける。この金の鍵、普段目にかかるような代物ではない。繊細な彫刻が施され、目立つのが王国の紋章。王国魔術師の一人だという証だ。彫刻以外にも、魔術具としての働きもあるらしいのだが、詳しいことはエレイドは知らない。

「なんであなたみたいなお偉いさんが？」

「あたしは別に偉くはないわよ。あたしがここに居るのは、ミラの事がいろいろうちの室長の耳に入ってたって事。ついでに溜まっている依頼もあたしが受けてあげる」

「っておい！俺が目をつけた仕事だぞ？」

「じゃあ、五・五で手を打たない？この量よ、半分でもそこそこになるんじゃない？」

フラムは依頼で埋まった掲示板を指差し、いたずらっぽく笑う。

「しょうがないな……」

「依頼は一応、冒険者にしか……」

「大丈夫、大丈夫。あたし、冒険者登録もしているから、問題ない

わ

フラムは気軽に言っで、今度は双頭の鷲が彫りこまれたメダルを取り出した。階級はエレイドと同じ二級。ダンは完全に言葉を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2167q/>

銀月の海賊船

2011年2月5日17時27分発行